

Title	日本語の複合語におけるアクセントの融合・非融合に関する研究
Author(s)	陳, 曦
Citation	大阪大学, 2019, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/72217
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

論文内容の要旨

氏 名 (陳 曦)	
論文題名	日本語の複合語におけるアクセントの融合・非融合に関する研究
<p>論文内容の要旨</p> <p>本研究は、窪菌(1988,1995,1998), 郡(2015,2016)を出発点とし, 現代日本語における複合語のアクセントの融合・非融合という従来あまり研究対象とされなかったテーマに注目し, 多角的に複合語のアクセントの融合・非融合問題を検討してきた。</p> <p>各章で明らかになったことを以下にまとめる。</p> <p>第3章では, 複合名詞(4字漢語)についてアクセント辞典におけるアクセントの融合・非融合の記述の実態を調査した。その結果から, 辞書類の見出しに上がっているような, 安定的に一語だと言えるものについては, 融合アクセントの所属語彙が圧倒的に多く, 非融合アクセントの所属語彙が少ないこと, そして融合・非融合両方の発音があるとされる語もあるが, その所属語彙が三者の中で一番少ないことが明らかになった。</p> <p>また, 『新明解日本語アクセント辞典』のCD音声で, 編集者である秋永氏のいう「分離文節」と「接合文節」の秋永氏自身による発音の特徴を確認した。分離文節と比べると接合文節のほうは, 後部要素におけるアクセントの山が低く抑えられていることが目立つ点については, 接合文節の発音は郡(2017)が「文内イントネーション」を論じる際の, 前部が後部を意味的に限定する文節などに生じる「アクセントを弱める」に, 分離文節の発音は「アクセントを弱めない」に相当するという考え方を提示したうえで, そして複合語全体が1つの中高型アクセントになるか否かという観点から, 「分離文節」と「接合文節」は本論文で言う「非融合アクセント」の2種類の実現の形, バリエーションとして扱う立場をとることにした。</p> <p>第4章では, 複合名詞の融合と非融合アクセントの聴覚的自然性を検討した。聴取調査Ⅰの結果, 融合アクセントか非融合アクセントかに関して, 発音時の優勢なアクセントとは違うアクセントを聞いた場合に不自然と評価される語が多かった。しかし, 融合化発音が非融合化発音に比べて自然度が高いものの割合が高いこと, そして, 「平板型+平板型」より, アクセント型の組み合わせが「頭高型+平板型」のものは, 非融合アクセント傾向が特に強い割合が高いことが分かった。</p> <p>以上のことから, 発音調査の結果と聴覚自然度調査の融合・非融合という選択傾向はかなり一致しているとは言え, 自分で言うときは非融合アクセントだが, 聴くときは両方とも違和感がない語がある可能性が示唆された。また, 融合アクセントの非融合アクセントに対する優位性が確認される。さらに, 前後要素のアクセント型の組み合わせもアクセントの融合・非融合の聴覚的自然度に関与していると考えられる。最後に, 上述の, 融合化類が非融合化類に比べて自然度が高いものの割合が高いことについては, あくまでも可能な解釈のひとつという程度に留まるが, 複合語のアクセントの融合・非融合という点では, 融合アクセントへ向かうという大勢があり, 今は融合アクセントへと緩慢ながら変わりつつあるという可能性を提示した。</p> <p>第5章では, 複合名詞の融合・非融合と語種について検討した。名詞+動詞の連用形(和語)の場合, 同じく後部3拍で, 前後の関係が同じで, 後部要素が漢語のときは非融合アクセントをとるとされている。後部要素が単純動詞の連用形(つまり和語)のときは融合することが確かに多いという点においては語種による影響があると認められる。しかし, こうした語種による影響は, 後部要素の自立性という要因が絡んでいるという考え方を提示した。その一方, 聴取調査の結果, 同じ後部要素を持つ, 漢語+漢語, 和語+漢語, 外来語+漢語をくらべたところ, 窪菌(1995)の言う「漢語よりも和語を含む複合語の方が, また和語よりも外来語を含む複合語の方が, 同じ意味関係であってもCARの適用を受けやすい」というようには, 融合アクセントを自然と判断した割合はなっていない。以上のことから「漢語よりも和語を含む複合語の方が, また和語よりも外来語を含む複合語の方が, 同じ意味関係であってもCARの適用を受けやすい」とは言いにくいようである。</p> <p>第6章では, 複合名詞のアクセントの融合・非融合と音韻構造の関係を検討した。具体的には, 「後部要素が動作を</p>	

あらかし、その後部要素を述語と見たとき、前部要素がヲ格に相当する」4字漢語のアクセントとしての融合・非融合について調べた結果、安定して融合しない語より、安定して融合する語の方が多く、そして融合・非融合を左右する要因として、前後の構成要素のモーラ数、前後のアクセント型の組み合わせ、後部要素の形態素構成、3字目の音節構造があることを示した。

このように、非融合アクセントに対する融合アクセントの優位性が確認でき、また、前部要素と後部要素のモーラ数やアクセント型が、複合名詞全体のアクセントの融合・非融合にある程度関与しているが、程度の小さい影響力にとどまることが窺えた。

第7章では、**複合名詞のアクセントの融合・非融合と要素間の統語的關係、そして要素の意味**を検討した。発音調査の結果から、後部要素が状態や動作をあらわす複合語のアクセントの融合・非融合を決める要因として、(ア)要素間の統語的關係があることを示したうえで、これは統語的關係の違いが、要素間の結びつきの強さに影響する形で複合語のアクセントを左右するという考え方を示した。具体的には、XとYが項関係のとき、さらにXが「ガ」格に相当する場合(「人気沸騰」など)、要素間の結びつきが比較的弱い(または弱いと思ってしまう)ため、非融合アクセントになることが比較的多い。

また、それだけではなく、(イ)要素が動作をあらわすかどうか、そして後部要素が動作をあらわすとき動作に〈変化〉の局面を含むかどうか、といった要素の意味もその一因であることを示した。具体的に、XもYも動作性をあらわすとき(「移住促進」など)、並列構造として捉えてしまいやすいため、非融合アクセントになることが比較的多い。そして、Yという動作に〈変化〉の局面を含むとき(「指針改定」など)、事象把握の際、静的だけではなく動的に捉えることもあるため、アクセントとして1単位に融合しないことが比較的多い。

第8章では、**同一の複合名詞の融合・非融合の使い分けに影響する文脈的要因**を検討した。聴取調査によって、以下の結果が得られた。アクセント辞典に融合と非融合の両パターンが記載されている複合名詞については、動作性・状態性の弱い文脈より動作性・状態性の強い文脈における非融合発音が「自然」と評価されることが多い。融合発音に対する「自然」評価は文脈の影響をあまり受けない。この結果から、動作性・状態性の強い文脈、つまり、後部要素のあらわす意味に焦点を当てる文では、非融合アクセント発音の聴覚的自然度上昇効果があることが確認できた。

そのうえで、同一の複合語の場合、そのアクセントの融合と非融合の使い分けには、焦点の当て方の違い、つまり後部要素の意味を取り立てるか否かが影響しているという考え方を提示した。

第9章では、**複合名詞の融合・非融合と複合語に対する親密度の關係**について検討した。その結果、複合語に対する親密度と聴取時の融合・非融合の自然度評価との關係について、親密度の低いものには非融合アクセントの自然度が高いものが多いのに対し、親密度の高いものには非融合アクセントの自然度が低いものが多いことが明らかになった。この結果は先行研究における「非融合アクセントで発音しやすい構造を持つ語でも、慣用化、つまり使用頻度が上がるにつれ、融合アクセントで発音するようになることが多い」という記述の妥当性が確認されたと言える。このように、異なる複合語のアクセントの融合・非融合を左右する要因として、複合語全体に対する親密度があることがデータによって示されたことになる。

第10章では、**並列關係など後部要素が状態や動作をあらわす以外の場合の複合名詞の融合と非融合**について検討した。聴取調査、発音調査の結果、そして先行研究の記述を併せ考えると、非融合アクセントをとるされていたものは、前後のアクセントの組み合わせによって遅速があるが、次第に融合アクセントも許されるようになってきているという考え方を提示した。

第11章では、**複合動詞、複合形容詞のアクセント**について、先行研究の調査結果を本研究の立場から整理し考察を加えた。

現在では、複合動詞・複合形容詞を含む動詞・形容詞全般のアクセントに「中高型」という大きな傾向がある。複合名詞はアクセントの融合・非融合という点では、融合アクセントへ向かうという大勢があり、今は融合アクセントへと緩慢ながら変わりつつある、という可能性を、複合動詞・複合形容詞のアクセントの「中高化」と並行で起きている現象としてとらえることができる。そして、この複合動詞・複合形容詞の中高化に鑑みると、全体が5拍以上で、後部要素が3拍以上の複合名詞についても非融合から融合へという変化の過程にあること、そして、その変化に前部要素と後部要素の統語的・意味的關係、前部要素と後部要素のアクセント型・拍数、親密度などの要因によって変化の遅速があり、将来的には非融合アクセントしか許されない語は少なくなり語的にのみ残る可能性があることを述べた。

また、この章では「**非融合・融合**」と「**分離型・接合型・結合型**」の關係について検討した。秋永氏の接合型と分離型を本研究の言う「非融合アクセント」のバリエーションとしてとらえた場合、「非融合アクセントから融合アクセントへと緩慢ながら変わりつつある」という傾向は、「接合型」(前部の語のアクセントを生かす傾向があるもの)から「結合型」(もとの語のアクセントによって定まるもの)への変化とも言えなくないことを述べた。ただし、本

研究の「非融合アクセント」は秋永氏の言う「接合語」，及び「接合文節」の一部（主に有核型＋平板型の場合）のように，後部要素のアクセントが完全に残っていない形をとることがさほど多くないと思われる。

第12章では，**院政期以前の複合名詞アクセント**について検討した。桜井(1958)の記述を本研究の立場から整理すると，後部要素が3拍の2要素からなる複合名詞のアクセントについては，平安・院政時代の京都方言には「融合アクセント」と「非融合アクセント」の2種類の形態があり，そして「非融合アクセント」をとるものより，「融合アクセント」をとるものが多かった。また，5拍語の場合，「融合アクセント」をとるとき，前部要素の式（低起・高起）が複合名詞の式を決定し，核の位置は常に最後から2拍目にあった。式保存の点においては現在の近畿アクセントと一致しているが，核の位置の点においては現在の近畿アクセント及び東京アクセントとは異なる。そのうえで，「非融合アクセント」の適用範囲は現在の東京アクセントと近畿アクセントより広がった可能性を提示した。

最後に，非融合アクセントをとるとされているものについては，融合アクセントの非融合アクセントに対する優位性が所々で確認された。これは川上(1995)の考え方を検証・継承したもので，アクセントの変化の観点から，一単位の形，つまり融合アクセントが優勢で，将来一単位化が進む可能性を提示している。

また，同一の複合語の場合，そのアクセントの融合と非融合の使い分けには，焦点の当て方の違い，つまり後部要素のあらわす意味を取り立てるか否かが影響している考え方を提示した。

このように，本研究は複合語アクセントの全体の流れとして非融合型主流から融合型主流へという方向性がある中で，意味によって非融合型と融合型の区別をしようとする働きも現在の東京方言にはある，と結論できる。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (陳 曦)	
	(職) 氏 名
論文審査担当者	主 査 教 授 郡 史 郎
	副 査 准教授 大 谷 晋 也
	副 査 教 授 井 元 秀 剛

論文審査の結果の要旨

陳曦氏の博士学位論文は日本語の複合語のアクセントを扱ったものである。日本語の複合語は、短いものを除けば、多くは「中国土産」（「チュ」ーゴク + ミ「ヤゲ」→ チュ「ーゴクミ」ヤゲ）のように、構成要素の本来のアクセントのいかんにかかわらず全体で中高型のアクセントをとる（本論文で言う「融合型」）。しかし、「中国南部」（「チュ」ーゴク+「ナ」ンブ → 「チュ」ーゴク「ナ」ンブ）のように、融合せず本来のアクセントを保持するものもある（「非融合型」）。また、融合型と非融合型の両方が使用される語もあり、その中には「事故防止」「人口減少」のように何らかの使い分けがなされていることを思わせるものもある。融合型と非融合型の選択原理について考察した先行研究は少ないながら存在するが、それでは説明できない例外が実際には多い。

本論文では、複合語を広くとらえ「中国南部」「事故防止」等も含めた上で、そのアクセントが融合型をとるか非融合型をとるかを決める原理は何かについて、音韻的特徴、語種、構成要素間の統語的・意味的關係、親密度、文脈的意味、時代変化という視点から多角的に検討している。資料として、複数のアクセント辞典の記述と、独自の発音調査および聴取調査の結果を利用している。

論文の構成は、序論、先行研究の紹介に続き、2要素からなる複合名詞、特にその多くを占める四字漢語を主な対象として、複数のアクセント辞典における融合・非融合の記載の実態とこの数十年での記載変化の有無の調査（第3章）、そして同一語を融合型と非融合型の両方で発音した場合のそれぞれの聴覚的自然性の調査（第4章）をおこなっている。その上で、後部要素が状態や動作をあらわす場合にもつばら対象を限定して、アクセントが融合するかしないかを決める要因として、構成要素の語種（第5章）、音韻構造（第6章）、構成要素間の統語的・意味的關係（第7章）、文脈（第8章）、親密度（第9章）の役割について検討した結果を報告している。さらに、第10章では、並列関係など、後部要素が状態や動作をあらわす以外の場合の検討、第11章では複合動詞と複合形容詞の検討、第12章は院政期と現代の実態との比較をおこなっている。最後に第13章で検討結果をまとめ、総合的考察をおこなっている。

結果として、以下の内容を述べている。

- ・要素間の統語的・意味的關係、親密度、そして文脈的意味（焦点の当て方の違い）が融合か非融合かの選択に影響を与えている。これらの要因は、複合名詞に対してその「ひとまとまり性」に注目するか「くみあわせ性」に注目するかの度合いの違いに関係していると考えられる。
- ・しかし、全体としては非融合型よりも融合型が優位であり、非融合型から融合型へという変化の方向性があると考えられる。

- ・音韻構造は、アクセントの融合・非融合に関して相対的に影響力が小さい。
- ・複合語の定義にアクセントを利用しない方がよいことを示し、複合語は音声的なまとまりという点で特徴づけられるとしている。

このように、本論文は複合語アクセントにおける融合型と非融合型の選択原理について初めて本格的に考察した力作である。考えられる限りのさまざまな要因について検討しようとする姿勢、そして多方面にわたる先行研究を消化した上で、説得力のある独自の新見解を提出した点において高く評価できる。

審査の過程において、語種や音韻構造の検討を研究の初期におこなったため、後に重要性が明らかになる構成要素の意味や文脈の影響を考慮した再分析が十分になされていないこと、そして、結果的に論旨に直接かわらない分析の結果まで書かれていることが問題とされたが、これらは本論文の新規性と重要性を損なうものではない。

以上から、本論文を博士（言語文化学）の学位論文として価値のあるものと認める。

なお、チェックツール“iThenticate”を使用し、剽窃、引用漏れ、二重投稿等のチェックを終えていることを申し添えます。